

「奉教」と「吃教」のあいだ：清末及び民国期の 広東地域社会におけるキリスト教経験

著者	土肥 歩
学位授与年月日	2014-03-07
URL	http://doi.org/10.15083/00006533

別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 土肥 歩

本論文「**「奉教」と「吃教」のあいだ——清末及び民国期の広東地域社会におけるキリスト教史**」は、近代中国における「キリスト教経験」をいかに叙述するかという問題意識に立脚しつつ、従来のキリスト教史では主題的に取り上げられることのなかった、教会の周辺に位置していた人々の存在に着目し、彼らの活動や事業にそくして、地域社会におけるキリスト教伝播の歴史的意義を解明しようとしたものである。題目中の「奉教」とはキリスト教を受容し主体的に近代中国の改革運動に関わっていった一群の中国人信徒を、また「吃教」とは衣食の用や庇護を求めてキリスト教会に接近した人々 (Rice Christian) を指すが、筆者は「受容」や「排外」の側面に光を当てる従来のアプローチでは、キリスト教を取りまく当時の地域社会の活きた実態を捉えられない限界があると述べ、むしろ「奉教」と「吃教」の間に在って教会とさまざまな関係を結んだ現地中国人を考察の対象に据える。

論文は、序章、本論 6 章 (第 4 章には補論を付す)、終章からなり、巻末に参考文献一覧 (12 頁) を付す。本文は A4 版で全 149 頁あり、字数は約 21.6 万字 (原稿用紙 400 字詰に換算して約 540 枚) の分量になる。

まず、筆者は序章「近代中国におけるキリスト教史をいかに論じるか」で、「叙述」型にはじまり、やがて「排外」型、「受容 (近代化)」型に展開していった近代中国キリスト史の研究状況を整理し、そこには中国にとってのキリスト教経験を内面の信仰や国家統合 (ナショナリズム) の問題に一面的に収束させてしまう限界と問題点があった、と指摘する。その上で筆者は、キリスト教布教の重要な拠点であったにもかかわらず、従来香港に比して研究が手薄であった広州という都市空間に着目し、現地のキリスト教系刊行物やニュージーランド長老教会宣教師であったジョージ・マクニール (George Hunter McNeur) の家族文書など、多くの未発見・未活用の史料を用いて、1880 年代から 1930 年代までのキリスト教 (プロテスタント) をめぐる地域社会史を描き出す、との本論文の主題を提示する。

第 1 章「1880 年代における広州格致書院の創設と地域社会」は、1830 年代にはじまる広東におけるプロテスタント布教の過程で、1888 年にアメリカ長老

会教会宣教団が、中国の高等教育普及のため格致書院（のちの嶺南大学、いまの中山大学）を創設するまでの経緯を跡づける。筆者は、プロテスタントの側に「教会大学」を創設したいとの思いは一貫してあったものの、宣教師間の対立や清仏戦争による混乱などもあって設置計画が頓挫していた中、広東の地域エリートによる「嘆願書」が書院設立に決定的な役割を果たしたことを詳述する。

続く第2章「清末在外中国人と中国キリスト教布教事業」では、ニュージーランド長老教会が組織した「広州郷村布教団」に注目し、その布教の背景にニュージーランドへの中国人移民の増大や人的流動性の高まりがあったことを指摘する。ここでは、華僑の信者／非信者もまた、金銭・私信の送付などを通じて、中国におけるキリスト教布教に直接・間接的に関わっていたという本論文のライト・モチーフが確認される。

第3章「1910年代の嶺南大学による南洋募金活動について」は、1910年代に嶺南大学の中国人教員によって展開された南洋（シンガポール、仏領インドシナ）での募金活動を考察した一章である。格致書院から発展した嶺南大学は、運営の危機に見舞われた1910年代、華僑からの募金により資金の確保と経営の再建に成功する。本章では、その中で中心的役割を果たした鍾栄光の思想や活動を軸に、広州地域社会による「南捐」（南洋華僑社会への募金活動）の起源を明らかにする。

第4章「招観海の「南捐」」は、敬愛堂の牧師であった招観海が学校と病院の建設のために「南捐」を進めた経緯を跡づけ、その中で教会を支持する地域社会の人々が大きな役割を果たしていたことを浮き彫りにする。補論では、筆者による招観海の弟招載寧への聞き取り記録を収め、今後のさらなる調査・研究の足がかりとする。

第5章「『梁発伝』各版本の異同についての考察」は、ジョージ・マクニュールが遺した『梁発伝』の英文・漢文の各種異本を照合し、テキストの生成と系譜関係を論じる。梁発は19世紀前半に広州で活動したロンドン伝道会の宣教師であり、キリスト教の教義を漢文で説いた著作『勸世良言』が洪秀全に思想的影響を与え、太平天国運動を引き起こすことになったことで知られる人物である。筆者はマクニュール家族文書や関連資料を博捜しながら、1930年代になって梁発の人物像が歴史の彼方から呼び起こされる過程を具体的に分析する。

1930年代における『梁発伝』刊行の意味をより広い文脈に位置づけるのが、最後の第6章「梁発の「発見」」である。ここで筆者は、広州の人々が梁発という地域の偉大な先人を「発見」し、その事績を中国キリスト教史に定位したば

かりではなく、『勸世良言』と太平天国運動を結びつける新たな歴史の語りを編み出すことによって、地域社会におけるキリスト教の来歴を中国近代史の一部に取り込む叙述様式を生み出したことを指摘する。

終章「中国近現代史におけるキリスト教史研究のゆくえ」では、以上の各章の内容が総括され、論文の意義と展望、さらに今後の課題として、中国近現代史における宗教史叙述の可能性が論じられる。

以上のような構成と内容をそなえる本論文に対して、審査委員会は中国キリスト教史研究に新生面を切り開く、水準の高い意欲作だとの点で意見の一致を見た。とくに、論文の長所として指摘されたのは、以下の3点である。

第一に、従来の研究では手薄であった現地史料（たとえば *Trustees of Lingnan University Correspondence*）と宣教師史料（たとえば *McNeur Family Papers*）をつきあわせて利用することで、中国におけるキリスト教布教をめぐる多くの新事実の発見をもたらしたことである。

第二に、教育や慈善の面で、キリスト教の布教活動と広州地域社会の人的ネットワークが交差する歴史の一断面を見事に描き出し、従来の「受容」「排外」型の叙述には収まらない宗教史の広がりやふくらみを示したことである。

第三に、送金や募金を通じ華僑社会と中国人キリスト教徒のつながりを示すことで、国家や都市社会を超えた広域的でトランス・ナショナルな歴史叙述の可能性を呈示したことである。

だが、本論文に若干の欠点や不足がないわけではない。審査委員会では、各章の完成度が高いだけに、全体として章のつながりが見えにくくなったのではないか、タイトルにある「あいだ」について、結論部分でもう少し突っ込んだ議論を展開しても良かったのではないか、との疑問が呈された。また、二次史料や先行研究の扱いに若干の疎漏が見られるとの指摘もなされた。さらに、キリスト教布教史の文脈から見ると、女性宣教師による教育事業や社会福音派の「改革」志向に十分な注意が払われていないとの不足点も挙げられた。とはいえ、以上述べたような短所は、本論文の学術的な価値を損なうものではない。

総括するに、本論文の達成が中国キリスト教史研究、中国近現代史研究に大きな貢献をもたらしたことは疑いない。したがって、本審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい論文と認定した。